

Shigeru Miyagawa: *Why Agree? Why Move?*
Unifying Agreement-Based and Discourse-
Configurational Languages

Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 2010. xiv + 182 pp.

横越 梓

1. 本書の概要

ミニマリスト・プログラムにおいては、全ての文法操作には動機付けがなければならぬと考えられている。つまり、必要がない限り文法操作は生じない。では何が文法操作を引き起こすのかというと、文法素性である。中でも特に一致素性が果たす役割は大きいと考えられている。しかし、そのような考えの下では、例えば日本語や韓国語等、形態的な一致を示さない言語をどのように扱えばいいのかが問題となる。

著者はこの問題を解決すべく、一致を持たない言語においても、焦点が実質的には一致と同じような働きをするという主張をしている。そして一致を持つ言語も持たない言語も、一つの一貫した理論の下で統合されるという考えを主張すべく、様々な言語のデータを観察・分析し、普遍文法の新しい理論を構築することを試みている。

本書の構成について先に触れておきたい。1章と2章では、本書の最大の目的である「人間言語にはなぜ一致があるのか」、「なぜ移動が起こるのか」という2つの問題に答えるべく主に概念的な議論を展開している。3章から5章までは、1章と2章で主張した分析の帰結として出てくる問題について、それぞれ通言語的データを数多く取り上げ議論を展開している。6章は結論である。

そこで本書評では、著者の大きな主張点でもある1章と2章の議論について

中心に概観しながら具体的な事例を検証して考察してみたい。

2. 一致が起こる理由

EPPの要請は常に何か他の要素と一緒に現れた時に生じるということが多くの論文によって議論されているが、この中で著者はEPPは一致によるものという立場をとっている。ではそもそもなぜ人間言語に一致があるのか。この問題に対して著者は、機能主要部とXPの2つの要素は何らかのルールにより関係付けられなくてはならず、この関係は φ 素性の一致により確立されるとしている。つまり、一致はprobeである機能主要部とgoalであるXPの間の機能関係を確立するために起こると主張している。そしてChomsky (2001) によるUniformity Principleを発展させ、より強い(1)のStrong Uniformityを提案している。

(1) Strong Uniformity

All languages share the same set of grammatical features, and every language overtly manifests these features.

著者によれば、一致のみられない言語も含め全ての言語には φ 素性とtopic/focus素性があるという。日本語や韓国語のような φ 素性一致の起こらない言語もあるが、それに相当するtopic/focusの一致があり、それが φ 素性と同様にA移動を要請する。一致はCに関連付けられ、解釈不可能素性の φ -probeはCからTへと継承される。したがって、英語のような一致言語と日本語・韓国語のような談話階層型言語の違いは、何がTへの移動を要請するかの違いになり、さらにはtopic/focus素性がフェイズであるCから下位のTのような主要部に継承されるかどうかの違いに集約できる。つまり、topic/focus素性が継承されれば談話階層型言語、継承されなければ一致言語、とパラメーターの違いとして説明できる。

著者はさらに、CとTの間に α という範疇が存在することを主張している。この種の主張はHolmberg and Nikanne (2002) のフィンランド語の観察など著者以外の論文でも多くみられ、focusが移動を引き起こすという文法素性で

あるという議論自体も新しいものではない。著者自身もバンツー語や日本語など多くのデータをもとに、 αP が現れる場合があると仮定している。そして φ -probe の継承については、T の他にも α が継承でき、これが A 移動を引き起こすと主張している。T にある φ -probe は主語を goal として探査するが、バンツー語で観察されるように、SVO だけでなく OVS や Loc (ative) VS 語順が可能なのは、 α にある topic 素性が目的語や場所句を探査し、移動を引き起こすのである。

談話階層言語である日本語には、主語—動詞の一致はないがそれに相当する人称一致がある。これは例えば、T よりも高い位置に現れる文末助詞が人称一致を起こすデータから示される。しかし、これらの文末助詞の生起は義務的ではなく、現れなくても構わない。つまり、(1) が意味するのは、文法素性は常に顕在的に現れていなければならない、ということではない。顕在的に現れている事例があることから一致がある、という理論が可能になると著者は主張している。

3. 移動が起こる理由とそのメカニズム

Chomsky (2001) 以降で述べられているように、 φ -probe は意味解釈の前に削除される。そうすると、一致の結果何も起こらなければ上記の理由で確立された probe-goal の間の一致関係の記録は残らず、情報構造のための解釈も削除されてしまう。移動現象はこの Agree によって形成された意味と情報構造の解釈のために必要な機能関係の記録を残すために行われる、と著者は主張している。これを示したものが Probe-goal union (PGU) であり、これは意味解釈へ転送される前に行われる。

(2) Probe-goal union (PGU)

A goal moves in order to unite with a probe.

本書の枠組みでは、全ての移動は φ 素性あるいは topic/focus 素性の一致と関連付けられているため、EPP のような独立の素性を仮定する必要はない。いわゆる EPP 効果と従来考えられてきたものは、格のためではなくあくまでも goal

である要素がprobeへ移動するため、と統合的に説明できる。

4. 帰結と考察

本書の3章から5章までは、上記で概観したStrong UniformityやPGUが実際にどのように機能するのかを、topic/focus素性の機能について分析を拡張し、様々な言語で観察されるA移動やwh疑問文などを実証しながらより統合的な説明を試みている。例えば、Holmberg and Nikanne (2002) によるフィンランド語の分析から、著者はtopic/focusは別の素性ではなく、-focusをデフォルトとする同じ素性であると仮定しており、+focusの要素と一致する場合のみprobe-goal関係が成立し、局所性を守る必要がある。一方-focusの場合にはprobe-goal関係を必要としないため、topicは自由に生起でき、例えばfocus-topic語順やtopic-focus語順が可能になると説明している。

また、PGUは全ての移動について適用されるため、A移動にもA'移動にも同様に適用されることになる。この2つの移動について、著者は、移動がフェイズ境界を越える場合には、移動した要素のコピーが解釈のために必要であるというPhase-based characterization of chains (PBCC)を提案し、A'移動の場合にはコピーを義務的に残す必要があるのに対し、A移動の場合にはそれが義務的ではないと説明することによって説明をし、これにより、移動の着地点や格などの問題を考慮することなく区別できるという点で興味深い理論を展開している。

しかし、PGUの満たし方やその詳細な仕組みについてはいくつか不明な点がある。例えば、著者はデンマーク語などにおけるthat痕跡効果のデータを挙げ、主語として虚辞が現れるとthat痕跡効果が回避できると説明している。英語の場合、thatが生じるとSpec, TPに現れることができないが、なぜ英語の場合にはそれができないのかという疑問が残る。

PGUについての別の疑問は、著者が説明しているアイルランド語のようなVSO言語の扱いである。このような言語では主語がVP内に残るためPGUを満たさないのが、著者はMcCloskey (2001) の分析に従い、主語はTP

のすぐ下の (Tに近い) 主語位置に移動しているため、PGUを満たしている
と主張している。直接Tに移動せずこれがどのようにPGUを満たしている
ということになるのか、具体的なシステムについては述べられておらず、ゆえに
PGUの取り扱いには今後より詳細な議論が必要になると思われる。

また上記に示した topic/focus の扱いについては、本書によれば - focus の場
合には probe-goal 関係がなくゆえにPGUを守る必要もない。そうなると topic
の移動は指定部を満たす目的ということになるが、これはEPPと実質上変わ
らないのではないだろうか。著者の分析からEPPは不要になるという帰結が
あるが、これを排除しきれないように思われる。

5. まとめ

紙数の都合上、本書の提示する多くの提案やその帰結について触れることは
できなかったが、理論的にも、また数多くの通言語的データを実証している点
でも大いに参考となる優れた研究書であるといえる。その詳細な仕組みや実証
として挙げているデータや議論は多少精緻さに欠けるものの、むしろ本書の意
義は、人間言語でなぜ一致が起こるのか、そしてなぜ移動が起きるのかという
2つの大きな問題について首尾一貫した理論を構築することで、英語のような
一致言語と日本語や韓国語のような談話階層言語の違いをパラメーターの違いと
して扱い、またそこから得られる帰結に様々な可能性を残している点にあるだ
ろう。ミニマリスト・プログラムにおける理論的貢献度は高く、今後の多くの
理論言語学研究に影響を与える研究書であることは間違いない。

参考文献

- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In Michael Kenstowicz, ed., *Ken Hale: A life in language*, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Holmberg, Anders, and Urpo Nikanne. 2002. Expletives, subjects, and topics in Finnish. In Peter Svenonius, ed., *Subjects, expletives, and the EPP*, 71-106. Oxford University

Press.

McCloskey, James. 2001. The distribution of subject properties in Irish. In William Davies and Stanley Dubinsky, eds., *Objects and other subjects: Grammatical functions, functional categories, and configurationality*, 157–192. Dordrecht: Kluwer.